

‘The letter killeth’—*Jude the Obscure* 論

藤 田 繁

わざはひなるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは予言者の墓をたて、義人の碑を飾りて言ふ、「我らもし先祖の時にありしなば、予言者の血を流すことに與せざりしものを」と。

『マタイ伝』23:29

Jude the Obscure の扉に、ハーディは、「儀文は殺す」という、聖書の一句を書きつけた。それは古えの牢獄の扉のように、謎めいて我々の前に立ちはだかっているように見える。「序文」において著者は、すでに、この小説は、「人間に知られた最も強い情熱の跡を追って群がる焦燥と熱病、嘲笑と災禍を冷徹にとり扱い、肉と霊の死の闘いを、いかなる言葉の気どりもなしに、語り、目的の果たされない悲劇を指摘する」¹⁾ ものであるといている。しかし、それはこの小説の材料をいっているのであって、作者の評価は ‘the letter killeth’ なる一句にこめられているのである。重々しいこの言葉に、この作品の素材とテーマが集約されているのである。よってこの小論は、*Jude the Obscure* における ‘the letter killeth’ の意味を探ることを目的とする。

われわれはその前に、‘the letter killeth’ の聖書における意味を随めておく必要がある。この言葉の解釈には、キリスト教の教義と歴史の通観を要するであろうが、この句が出ている『コリント後書』三章六節のコンテクストを見るだけでも、おおよそのことはわかる。六節以下は、現代日本語訳では次のようになっている。「神はわたしたちに力を与えて、新しい契約に仕える者とされたのである。それは、文字に仕える者ではなく、霊に仕える者である。文字は人を殺し、霊は人を生かす。もし石に彫りつけた文字による死の務が栄光のうちに行為れ、そのためイスラエルの子らは、モーセの顔の消え去るべき栄光のゆえに、その顔を見つめることができなかつたとすれば、まして霊の務は、

本稿は、1970年11月8日(日)、滋賀大学における、日本ハーディ協会第13回大会にて発表された論文に加筆したものである。

(1) *Jude the Obscure* (Macmillan, Library edition, 1951), p. vi.

はるかに栄光あるものではなからうか。もし罪を宣告する務が栄光あるものとすれば、義を宣言する務は、はるかに栄光に満ちたものである。」²⁾ 'the letter killeth' の the letter とは、ここにも明らかなように、旧約即ちモーセが山上にて石の板に書き記した十誡のことなのである。その掟に無条件に縛るとき、人を殺してしまうのだ、^{じつがい}というのが、「儀文は殺す」の意味である。しかも、「神はわたしたちに力を与えて、新しい契約に仕える者とされたのである」とパウロがいうのをきけば、'the letter killeth' なる、本来ユダヤ教に投げつけるべき言葉を、Jude が生きた「新しい契約」の世界に投げかけている点に、怨念のこもったアイロニーがあるのである。

ならば、'the letter killeth' の 'letter' は『ジュード』において何をさすのであろうか、またそれは何を殺すのであろうか、はたまた、そういう情況を作者はどのように受けとめるのであろうか。それを究明してゆくために、先ず、聖書の意義に最も近い、しかも作品 *Jude* の story の骨格をなしている、結婚の問題を考えてゆきたい。

投げつけられた豚の pizzle によって始まる Jude と Arabella の関係は、Arabella の計略によって、結婚という契約に終る。作者はそれを、二度にわたって、Samson と Delilah³⁾ の関係になぞらえる。しかし、愛のないこの関係はもろくも崩れさり、Arabella はオーストラリアに、Jude は念願の Christminster にゆく。この地で Jude は Sue に惹かれてゆくが、その渴望を三つの理由によって抑える。「第一の理由は、自分は結婚しており、彼女を親戚のひとつとみる以外の見方をすれば、それは間違いであろう、ということ；第二の理由は、自分たちは従兄妹どうしであるということ、たとえ情況がこの情熱に利あると思われるときでさえも、いどこ同士が恋におちいることはよくないのだ。第三は、たとえ自由の身であっても、結婚が常に悲劇的な悲慘を意味するような家系の者なら、血族結婚は逆境を倍化し、悲劇的な悲慘は、悲劇的な恐怖にまで強められてしまうだろう、ということであった。」⁴⁾ 第三は別としても、第一、第二は重婚とインセストのことであり、モーセは無論、新約も厳禁するところのことであった。即ち、'the letter' の禁ずるところのことである。このことは、一頁あとで、Sue を盗み見ながら、折しも歌われた『詩篇』第百十九篇—「わかき人は何によりてかその道をきよめん」(119:9)⁵⁾—を聞いて、己が 'an animal passion for a woman'⁶⁾ を反省するところで立証されるであろう。『詩篇』119 は、「おのが道をなほくしてエホバの律法をあゆむ者^{おきて}

(2) 「コリント人への第二の手紙」3: 6-9.

(3) *Ibid.*, pp. 51, 82.

(4) *Ibid.*, p. 105.

(5) *Ibid.*, p. 107.

(6) *Ibid.*, p. 107.

はさいはひなり」で始まる、「儀文は殺す」を内容とした個所なのである。このような Jude に対して、Sue は、「少くともわたしは、結婚というものをサクラメント（秘蹟）とは考えませんからね」⁷⁾ という女である。この言葉が、Jude が Arabella との結婚を打ち明けたときになされたとしても、Jude が 'a perfect Voltaire'⁸⁾ という程の Sue だったのである。しかしこの Sue も、「わたしたちはいとこ同士だし、いとこが結婚するのはよくないわ」⁹⁾ と、遺伝というよりは近親相姦の観点からの言辞をなしている。だが、この Jude も、やがて転機を迎える。Phillotson と結婚した Sue と Jude は、Aunt Drusilla の死によって、Marygreen で再会する。その夜、罌にはまった兎が、彼らを引きつけ、彼らを結びつけ、彼ら自身の運命の象徴となる。窓越しに Sue の手を取りキスしながら、Jude は、「ぼくはもう教義も宗教もどうだっていいんだ！』¹⁰⁾ という。翌朝、別れのとき、沈黙の街道で思わず「はげしく、長く』¹¹⁾ 口づけする。作者はそれを、'The kiss was a turning-point in Jude's career'¹²⁾ と位置づける。ここにおいて二人は完全に「律法」を破ったのである。Jude は僧侶になる夢から訣別し、関係書を燃やしてしま^やす。一方 Sue は、夫と寝室を別にし、彼がそこに入ってきたのをきっかけに、Phillotson に別居を申し出る。「男と女が、今のわたしのような気持で、深いつきあいをしてゆくのは、事情がどうであれ、たとえ合法的であろうと、姦淫ですわ」¹³⁾ という。この時点での Sue の adultery 観は、聖書のそれと全く反対のものである。Phillotson も、「自然で真っすぐな人間性に基いて」¹⁴⁾ Sue を Jude のもとに送ってやる。同棲するようになった二人は、しかしながら、結婚をしない。Phillotson からも、Arabella からも離婚した二人がなぜ結婚しないか。「シェード、わたし、あなたが役所のハンコのもとにわたしを大切にす契約をし、同じ家であなたに愛されることをお上から認可された瞬間に、あなを恐れ始めるんじゃないかと思うの— ああ、なんといやな、みじめなこと！」¹⁵⁾ と Sue はいう。彼女はこの契約を 'iron contract'¹⁶⁾ と呼ぶ。Sue は、契約そのものが人間性を損ってゆくと考えるのである。「法律的義務からしらずしらずのうちにでてくる態度がこわくないこと？ 法律に縛られる

(7) *Ibid.*, p. 199.

(8) *Ibid.*, p. 200.

(9) *Ibid.*, p. 201.

(10) *Ibid.*, p. 258.

(11) *Ibid.*, p. 261.

(12) *Ibid.*, p. 261.

(13) *Ibid.*, p. 268.

(14) *Ibid.*, p. 298.

(15) *Ibid.*, p. 312.

(16) *Ibid.*, p. 311.

と、情熱は破壊されてしまうと思わない？ 情熱の本質は無償だということなんですもの」¹⁷⁾ という Sue の言葉は、Arabella の結婚観と対蹠的な関係にある：「男と一緒に生活は、結婚の後ではビジネスライクになって、お金が肝要ということになるのよ。いいわねえ、結婚してりゃ、喧嘩して追っ出されても、法律に守って貰えるのよ。でなけりゃ、ナイフでぐさっとやられるか、火かき棒でおつむをかちわられるかでもしないと、守ってくれませんかからね。」¹⁸⁾ Sue のいう「鉄の契約」が「儀文」と重なっていることはいうまでもない。Little Jude を引きとったために、夫婦という体裁が必要になって、役場に婚姻届を出しにゆき、その書式の非人間性に Sue がおののくとき、Jude がモーセの言葉——「誰か女と契りて之を娶らざる者あるか、その人は家に帰りゆくべし。恐らくは自己^{おのれ}戦闘に死て他人^{ほか}これを娶らん」¹⁹⁾——を引用するのも、そのゆえである。また、「契り」によって縛ってしまうことを身上とする Arabella が、Phyllotson に Sue を強制的に縛っておくべきだったといって引用するのがモーセの言葉であるのもそのためである。「斯せば夫は罪なく妻はその罪を任はん」²⁰⁾ という言葉の一つ前は、「また夫たる者^{かく}猜疑の心を越してその妻を疑ふ時はその婦人をエホバの前におきて祭司^{うたがひ}その律法のごとく之を行ふべきなり」というのであって、「之」とは、探湯^{くみだち}の類の恐ろしい証なのである。かくして、二人は遂に結婚をしない。それは、「儀文は殺す」からだ。最後の Part で、下宿のお上にいうように、Sue の言葉でいえば、「契約は愛を殺す」²¹⁾ からである。

しかし、この Sue が崩れ去る。その原因の詳細は後にゆずるとして、直接には、Father Time の Sue の子供をつれての無理心中による。‘Done because we are too menny.’²²⁾ なる遺書を見たとき、「シューの神経は完全に崩壊した」²³⁾ と作者は書く。それは、*The End of the Affair* の Sarah に起こったのと現象は似ているが、全く異なる内容のものであった。神の前で誓った結婚を破って、Jude と一緒になったことは、姦通であり、incest である、今やその掟を破ったことの神の怒りがふりかかったのだ、と思ひ込んでゆく。検死を待っているとき、大学の中から起った陰鬱なオルガンの音に Sue は息をとめる。²⁴⁾ その奏る『詩篇』73の27節は、「視よなんちに速きものは滅

(17) *Ibid.*, p. 327.

(18) *Ibid.*, p. 324.

(19) *Ibid.*, p. 338. 『申命記』20: 7.

(20) *Ibid.*, p. 384. 『民数紀略』5: 31.

(21) *Ibid.*, p. 398.

(22) *Ibid.*, p. 405.

(23) *Ibid.*, p. 405.

(24) *Ibid.*, p. 407.

びん、汝をはなれて姦淫^{たはれ}をおこなふ者はみななんち之をほろぼしたまひたり」という。ここで、われわれは、‘Maiden no more’ となって、Alec の許から脱出した Tess を思い出す。「うら悲しい十月とともとうら悲しい彼女とが唯一の通行人と思われる」小径で、出あった男が stile の板に、「読み人に深く打ち込むために間をおくかの如く、一語一語の後に句点をうって」、「ペテロ後書」2章3節の句を、真紅のペンキで書きつける。「汝の、滅亡^{はろび}は、寝ね、ず」このあと著者はいう、「平和な風景、蒼ざめうら枯れた雑木林、地平線の青い空、苔むした踏み板を背景にして、これらのけげんばしい真紅の文字は輝き出した。それらは、けたたましくわめきたてて、大気をとよもさせているようだった。そのおぞましい汚穢せる文字——そのよき頃には人類に役立った一教義のグロテスクな最終面をみて、ある人はこうも叫んだであろう、『ああ、あはれなるかな、神学よ!』と。」Tess はそれらの文字が ‘Killing!’ だという。この男は更に壁に同じく「火のような文字」を書きなぐる、「汝、犯す、勿れ——」(Tess XII)。これらの聖書の文句が、Jude のテーマを表わしていることは、明らかである。「ペテロ後書」2章は「好色」をいましめる章である。「(主は、)肉に随ひて、汚れたる情欲のうちを歩み、権ある者を軽んずる者を罰することを知り給ふ。」(同、2:10) また、後の句はいわずと知れた姦淫へのいましめである。重要なことは、これが Tess のまさにあの時点でいわれ、Tess を ‘killing’ することだ。Jude the Obscure は、Tess of the d'Urbervilles のテーマの一つを展開深化させたものであることがわかるであろう。さて、Tess とは反対に、Sue の反動は早く、根深い。儀式教会といわれる Saint Silas に行くようになり、「神と争っても無駄ですわ」²⁵⁾ という。作者はその状態を次のようにいう、「シュードに起こった変りようは、次のようなものだった——即ち、今はもう教会の礼拝にあまり行かなくなりました。彼を何より悩ますことが一つあった。シューと自分があの悲劇以来、精神的に反対の方向へ進んでいるということであった。人生や、法律、習慣、教義について彼の見識を広めた出来事が、同じような作用をシューの考えに及ぼさなかったわけである。彼女はもうあの自由独立の時代と、同じ人間ではなかった。あの頃のシューの知性は、シュードの(今はちがうが)当時あがめていた因襲や形式的儀礼をやっつけて、まるできらめく稲妻のようにひらめいたものだった。」²⁶⁾ この線のゆきつくところは明らかである。Sue は Jude と別れることを決意する、愛しながら。

「あなたが嫌いじゃないのよ、シュード。」優しい哀願するような声

(25) Ibid., p. 413.

(26) Ibid., p. 415.

で言った。「今も愛してるわ！ ただ——あなたを愛してはいけないんだわ——もう。おお、もう愛してはならないんです！」

「そんなこと認められないよ。」

「でも、あなたの妻ではないと決心したんです！ わたしはあの人のもの——生涯をあの人と共にすると神に誓ったのだわ。何事もそれを変えることは出来ません！」

「しかし、ぼくらは確かに夫婦なんだ、この世に夫婦というものがあるなら。＜自然＞の結婚だ、疑いなく！」

「でも、天のじゃありません。別の結婚が天で結ばれ、メルチェスターの教会で永遠の効力を与えられたのです。」²⁷⁾

‘the letter killeth’ とは、この Heaven’s marriage が Nature’s own marriage を殺すことなのであり、ここに問題があるのである。二人は別れる。「聖書のその章の考えでは、われわれは一つだ、わがひとよ、それに従って、ぼくらは友人として別れよう」²⁸⁾ とそのとき Jude はいう。‘the letter killeth’ と、その章即ち『コリント前書』13章との対立は後に詳論するが、先ず結婚に関する限りで、何が何を殺すかは鮮明になったであろう。従って、Sue が Phillotson の所で、再婚用のライセンスを見たとき、「彼女は、己れの棺をみた死刑囚の表情をした」²⁹⁾ のであり、これまた Jude と再婚した Arabella が、彼女を「売女」^{ばいた}³⁰⁾ と呼び、Jude はその言葉に痛いところを触れられて、激怒するのである。しかし、抑えられた自然は必らず出てくる。Jude 側から最後の抵抗がなされる。重態に近い彼が、Sue と逃げることを提案しにゆく。その時、‘the letter killeth’ の句が本文に於てただ一ヶ所出てくる。‘Sue, Sue! we are acting by the letter; and “the letter killeth”!’³¹⁾ 「シュー、シュー！ぼくらは今のいま、儀文によって行動を律している。そしてその『儀文は殺す』んだ！」一たんはゆらいだ Sue だが、‘creed-

(27) *Ibid.*, p. 423. 作者は、一概に ‘Nature’ がいいといっているのではない。もしそうなら、Arabella の行動はもっと是認されるであろう。‘Nature’ の内容が問題なのである。それが打算から解放された愛の心情の場合、作者は認める。三部七章メルチェスターで、Jude と Sue に、上の ‘Heaven’s marriage’ の直前に、心情のこもった事実上の結婚式をさせるのは、Sue の潜在意識を表現すると共に、作者のそういう意図を表わすものであろう。「彼らは目立たないように本堂を通って祭壇の欄干の方に歩いていった。黙ってそれにもたれて立っていたが、それから元の方に向きなると再び本堂を引き返していった。彼女の手はジュードの腕にかかり、まるで今結婚したばかりの二人のように。」(p. 207)

(28) *Ibid.*, p. 437.

(29) *Ibid.*, p. 440.

(30) *Ibid.*, pp. 467, 483.

(31) *Ibid.*, p. 469.

drunk' ³²⁾ なる彼女はふみとどまる。かくて、Jude は文字通り死に——美しい顔をして——³³⁾ Sue は「みじめにやつれはて」「何年も何年もふけ込んでしまう」³⁴⁾ のである。従って、常にリアリスティックな真実を語る Arabella の言葉で、作者はこの作品を終えるのである：「あの女には、Jude の手をはなれたときからやすらぎがなくなってしまったのよ。もう二度とやすらぐことはないでしょうよ、この人のように、死んじまうまでは！」³⁵⁾

以上、Jude と Sue が「儀文」によって「殺され」てゆく過程を内部よりみたのであるが、しかし、「儀文」は単に文字であって、それだけで、儀文を信じていなかった Sue の魂を破滅させることも、Jude が悲惨な最後をとげることもないのである。「石に彫り書されたる死の法の職」を「死の職」たらしめた力があるのである。Sue が遂に屈する直接の契機となった Feather Time の死からして、彼を自殺に迫りやった外の原因がある。なぜ「おおすぎるのでやった」のか。それは、結婚していない、即ち、法を守っていない二人に、世間は家も職も与えようとしなかったからである。それはまた何故なのか？ここに、Christminster がミラージュの如く不気味に浮び上ってくるのである。

11才のとき「赤小屋」より始めてみた日より、Christminster は Jude にとって、Jerusalem となる。³⁶⁾ 夕空に、あるいは夜空に、遠く浮んだこの市は、やがて Jude の中に内面化され、彼の内に外に、また、実際生活で Jude もこの街の内に外に、生涯を通じて存在する。いや、Christminster は、Jude を支配するだけではない。Sue も Phillotson も、更には、作品 *Jude* の全体がその支配下にある。しかも、この「光明の市」(a city of light) は、彼らを 'obscure' にするのである。³⁷⁾ この証拠は、彼らの生涯の経過に

(32) *Ibid.*, p. 471.

(33) *Ibid.*, p. 492.

(34) *Ibid.*, p. 493.

(35) *Ibid.*, p. 494.

(36) Christminster が 'The heavenly Jerusalem' (p. 18) とか、'the new Jerusalem' (p. 20) とか、Jerusalem なる賓辞で出てくるのは、全篇にわたっている。Christminster=Jerusalem が、この作品の腑として存在しているのは明らかであろう。Jude-Sue-Phillotson が宿命的に引き寄せられるのは、Christminster=Jerusalem の作用によってであり、かつまた、それへである。Christminster で三者を遭遇させるのは、「エルサレムの模倣」(p. 124) であったし、最終部で、「記念日」に彼らを再会させるのも、Jerusalem としての Christminster の働きである。Phillotson について、Sue はいう：「あの人、きっと私たちのように、祭典を見にエルサレムに出てきたんだわ。」(p. 396)

(37) Christminster が 'city of light' として言及されるのは数ヶ所である。しかも、それが、「日蔭者たち」を 'obscure' にするのは、実際のイメージとしても、絶えず描写されるところである。例えば、その街の陰湿な「壁」の描かれることのなんと多いことか。その undertone として、Jude の石を刻む音と、寺院の鐘の音が、「日蔭」の時間と死を伝えているのである。「それから彼女 (Sue) はカー

歴然としている。Christminster は、Christ と Minster の複合語³⁸⁾ であることは、作品の中でもいっているところである。即ち、scholarship と religion³⁹⁾ の中心地であることが、全篇にわたって言及され、強調されている。そこは、学者は無論のこと、「坊さまを畑の大根のように製造し」⁴⁰⁾ 送り出している。つまり、Christminster は、世の中に支配者や管理者を送り出し、ブルジョア社会における管理の理念と機能を提供している。換言すれば、それは体制の中心点なのである。これが、Jude たちの生涯を歪め、締め殺してゆくのである。Jude は Christminster に学んで、学者か牧師になる夢をもっていた。しかし、学寮長達の態度にみられる如く、冷たく拒絶される。その夜彼は、チョークで大学の門に『ヨブ記』の一節を書きつける：「我もなんぢらと同じく心あり、我はなんじらの下に立ず、誰か汝らの言し如き事を知らざらんや。」⁴¹⁾ 石工は石工でおれという学寮長たちへの精一杯の反抗であった。ここでは、Dean たちは、ヨブの友人達、即ち、冷たい教条主義者にたとえられている。後に Sue が Jude にいうところにこのことは要約されている：「クライストミンスターは無知な所だわ、町の人々や、職人や、酔ばらいや、貧民は別だけど。勿論、こういう人たちこそ人生をありのままに見てるんだわ。それにひきかえ、大学の人たちときたらてんでわかってないんだから。あなたは身をもって証明されたわね。あなたのような人にこそ、クライストミンスターのカレッジは創設されたのよ——お金も機会も縁故もないが、学問への情熱は持ち合せている人に。でも、あなたは、百万長者の息子たちに、舗道から押し出されてしまった。」⁴²⁾ Christminster は、大学の原点を忘れてしまっているのである。Jude の夢を奪った Christminster は、しかもなお、Jude を苦しめてゆく。それは宗教の側からだ。既に述べたように、人間性をたっとぶゆえ

テンのない窓から外の景色を見た。向いの少し離れたところに——沈黙した、黒い、窓なしの——サーコファガス大学の外壁が四世紀にわたる陰うつと偏執と衰退の蔭を彼女のいる小さな部屋に投げかけ、夜は月光を、昼は日光を、さえぎってきたのである。」(p. 401) Christminster は、物理的にも、「石棺」('Sarcophagus College'), 「典礼法規」('Rubric College'), 「殉教者」('Martyrs' Memorial) の市なのである。

小さな子供は口を四角にして、黙って泣いた。災難が不気味に迫ってくるのを本能的に感じとったのだ。少年は溜息をついた。「ばく、クライストミンスターが好きじゃないよ！あの大きな古い家々は半屋なの？」と彼は言った。

「いや、いや、大学寮だよ。」ジュードは言った。「たぶんいつかお前もあそこでお勉強することになるだろうよ。」

(38) *Ibid.*, p. 139.

(39) *Ibid.*, pp. 25, 27, 133, etc.

(40) *Ibid.*, p. 23.

(41) *Ibid.*, p. 140. 『ヨブ記』12:3.

(42) *Ibid.*, pp. 180-181.

に、Jude と Sue は結婚しないし、その理由で、Phillotson も Sue を Jude の許に託したのであった。が、この為に、Jude は、掟を破ったものとして、次々と職を失ってゆく。Phillotson の場合も同じで、Shaston の小学校を皮切りに、次々と追われ、Marygreen の小さな小学校に身をひそめている有様だ。そのような迫害を加えるのは、常に既成キリスト教—Christminster Anglicanism⁽⁴³⁾—なのである。そればかりではない、町の人々が Jude たちに石をなげるのは、そのような教師たちによってかもされた因襲によるのである。かくして、彼らは Wandering Jew のように、家から家へ、町から町へさまよいつづねねばならず、その果に、Little Jude の自殺が結果するのである。Sue が瓦解するとき、Phillotson は叫ぶ：「シューはクライストミンスター^{えきしや}の情緒と教養に影響されてるんだ。」⁽⁴⁴⁾ Christminster 及びその延長の教会は、まことに ironical なことに、死の法なる「儀文」なのである。Phillotson と Sue、Jude と Arabella の離婚、再婚のときの、あの牧師たちの露骨な言葉を見よ。妻の家出に同意した Phillotson に、Shaston の牧師はいう：「あなたと奥さんの地位を回復するのにできることといえば唯一つ、強い賢明な手で、奥さんを捕えていなかった誤りを認めて、あの方が帰ってこられる場合には、これを引き取り、将来とも毅然たる態度で居なさることです。」⁽⁴⁵⁾ これは、体制からはみ出た者に対する恫喝である。再婚なった彼に、別の牧師が微笑をもって、「終りよければ全てよし」⁽⁴⁶⁾ と保証する。あるいは再婚なった Arabella に牧師はいう：「フォーレイ夫人、心からお祝い申し上げます。あなたとご主人の過去をうかがって、あなた方は正しく適切なことをなさったと思います。あなたの過去の妻としての過ちと、ご主人の過ちは、あなた方がお互いを許し合われたいま、世間から許されるべきだと思います。厳密に言えば、教会は、教義上、離婚を認めません。神結び給いしもの、人これを離すべからず、という礼拝の言葉を、汝の出づると入るとを問わず、銘記しなさい。」⁽⁴⁷⁾ 「新約の役者」たるものが、「儀文^{えきしや}の役者」になっている。Christminster は、学問の点でも、宗教の点でも、完全に、原点を忘れてしまって、荒廃した体制になりきってしまっているのである。

体制そのものとなって圧力をかけてくる Christminster に、先ず、Phillotson が崩れ、体制側に転向する。⁽⁴⁸⁾ 次に、遙かに深刻に、根源的に Sue が

(43) *Ibid.*, p. 180.

(44) *Ibid.*, p. 433.

(45) *Ibid.*, p. 443.

(46) *Ibid.*, p. 446.

(47) *Ibid.*, pp. 463-464.

(48) 「自然で真つすぐな人間性」(p. 298) を押しやって Phillotson は計算し始める。「世間の軽蔑という冷たい残酷な風を食い止めるためには、工夫の必要なこと

屈服する。それは、転向ではない転向であるがゆえに悲惨だ。最後に残るのは Jude である。彼の歴史は、葛藤を経て、Christminster から訣別へと向ってゆく歴史である。その第一回は、Christminster に拒絶されて帰郷したときに感じる。「こんなに無学な状態で〈教会〉に入り、おおかた、一生を通じて牧師補以上に昇進することなく、日陰の村や町のスラムで命をすりへらしてしまうこと——そこに一抹の善と偉大性があるかもしれぬ。それこそ真の宗教かもしれぬ」⁽⁴⁹⁾ と。しかし、それ以後もひどい目にあいながら、彼の内部に Christminster は息づいてやまない。そのおかげでなかったかもしれない病気の最中でも、生活の糧に売るパンが、Christminster を型どったものであるほどだ。再度 Christminster に来て、卒業式をみ、‘the infernal cursed place’⁽⁵⁰⁾ といながら、尚、Jude はこの市に呪縛されている。下宿を全て断られたあとで Sue は、「純真な男を支配する情熱の不思議な働きのことを考える」。「今でさえも、Jude は、あの学問の壁が彼の志望に対して跳ねかえした氷のような拒絶の反響を、はっきりと聞いてはいないのであった。」⁽⁵¹⁾ だが、この Jude も、Father Time の事件以来、変ってゆき、病床から脱けて Sue に会いにいったときには、「ぼくなら戦って死のうものを！」⁽⁵²⁾ という。にもかかわらず、死の床にありながら、大学のことをつぶやき続ける彼である。Joyce の Stephen Dedalus の先駆がここにいる。結局、Christminster から彼が解放されるのは、死によってであった。

「儀文」によって「殺され」てゆく人々——「光明の市」なる「日蔭者たち」の世界——Jude や Sue や Father Time の世界を、作者は Job の世界としてとらえているように思われる。『ヨブ記』の提起する問題は、「正義と愛の唯一なる神によって作られ、また支持せられているこの世界に、何故に苦痛と悪とが存在するか」⁽⁵³⁾ ということに要約されよう。少年 Jude が、カラスに麦を食べさせてやって、農夫 Troutham になぐられたとき、「神の鳥にとってよいことが、神の百姓にとって悪いという、この世の計画の欠陥」⁽⁵⁴⁾ が提示され

がわかっていた。しかも、その下地はすでに出来ているのだ。彼女について考え違いをし、不当な離婚をしてしまったという体裁のいい口実で、シューをとり戻し、彼女と再婚すれば、そのことで、多少の慰めもえられ、昔の経歴に立ちかえり、——有資格牧師として教会に帰ることは無理としても、——シャストンの学校にいら、多分帰ることも可能となってきたのである。」(p. 432)

(49) *Ibid.*, p. 153.

(50) *Ibid.*, p. 396.

(51) *Ibid.*, p. 401.

(52) *Ibid.*, p. 470.

(53) 『聖書大辞典』(新教出版社), p. 1264. 『ヨブ記』の提起する問題と解答については、種々の解釈の仕方がある。答えは問いに規制されるとしても、問いに関しては、ここに引用した捉え方が妥当ではなからうか。

(54) *Ibid.*, p. 13.

ている。これは『ヨブ記』38章41節の、「また鵝の子神に向ひて呼はり、食物なくして徘徊の時鵝に餌を与ふる者は誰ぞや」への皮肉であると同時に、『ヨブ記』の提出するのと同じ問題を出しているのである。あるいは、Jude の運命の象徴として出てくる、殺される豚も、Jude と Sue をおびき寄せる、罠にかかった兎も、彼らの運命を先どりすると共に、上記の問題をも出しているのである。Sue や Jude たちが、時折、店突に、宇宙の矛盾に言い及ぶのも、作者が意識的にするところであろう⁵⁵⁾。これらの伏線が焦点を結んで、最高潮に達するのが、死にゆく Jude の呟く、『ヨブ記』3章：「我が生れし日亡びうせよ、男子胎にやどれりと言し夜も亦然あれ」⁵⁶⁾ 以下である。この苦しみを Jude にもたらしたのは、彼の性格、環境、など、彼個人に関係したファクターが関与していることは無論だが、何よりも、Christminster に代表せられる「儀文」であった。では、それから救われる道はあるのか。Hardy はそれを『コリント前書』第13章に求める。Sue といよいよ別れるとき、Jude はいう：「君が宗教という名で呼んでいる他の全ての言葉が滅び去っても、その章はゆるぎなく立ってるだろう！」⁵⁷⁾ この章は、愛のことを説いて、聖書の中でも最も美しい箇所の一つである。「げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり」⁵⁸⁾ Sue と始めて会った殉教者の焚刑所を、酔いながら Arabella と通りすぎるときに、「わが体を焼かるる為に付すとも、愛なくば我に益なし。」⁵⁹⁾ というのは、ここでも、この作品のテーマを繰り返しているのである。作品 Jude は、「儀文が殺す」さまを「冷徹に」辿りながら、愛の重要性を説く。体制に対するに、ヒューマニズムをもってくるのである。

以上、「儀文は殺す」の意味内容の検討によって、腐敗した体制になりきった、キリスト教と学問の姿をみた。「わざはひなるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども内は死人の

(55) Part IV の iii 章がその一例である。Sue の寢室に入ったことでひどい仕打をうけた Phillotson が詰問するのに対して、Sue は、「たぶんわたしが悪くてよこしまなんです。ほんとうにご免なさい。でも、悪いのはわたしばかりじゃない！」「じゃ、誰なんだ？ わたしか？」という Phillotson に、「いいえ——わかりません！ たぶん宇宙が——ものごと一般が——あまりに恐ろしくて残酷なんですもの！」と Sue は答える。キリスト教社会の思考パターンとしても、コンテクスの中で店突だとの感じはまぬがれない。そして、こういう所が、ハーディの主人公たちの主体的責任の欠如の有力な証拠としてあげられても、一面の真理はある。

(56) *Ibid.*, p. 488.

(57) *Ibid.*, p. 437.

(58) 『コリント前書』13:13.

(59) *Ibid.*, p. 454. 『コリント前書』13:3.

骨とさまざまな穢^{けがれ}とにて満つ」, キリストが糾弾した, まさにその「白く塗りたる墓」に, Christminster はなってしまうのである。それならば, 'the letter killeth' と反対の態度をとる Jude は真の意味のキリスト教徒なのだろうか。一見そのようにみえる。Jude の生涯は, イエスの生涯と, 恐らくは意図的に, きわめてよく似ている。キリストもユードも大工だということは一番小さい共通点だ。ナザレからガリラヤを経てエルサレムに入城するところ, パリサイ人と闘い, その奸計により, 十字架にかかるところ, 受洗, 野の誘惑, 井戸, 最後の水, など, 外面的にも, 内面的にも似たところがある。失意のうちに Marygreen にまい戻ったとき, 「疲れ, 泥まみれになっているが, 平常通り顔はさえたままで, 井戸の側に座って, 自分はなんとみじめなキリストになったことだろう」⁽⁶⁰⁾ と Jude は考えるし, また希望をもって, 「30才に——即ち, ガリラヤで彼の手本と仰ぐお方が始めて説教した年なので, 特に彼の興味をひいた年に——聖職を始めるように来るべき年月を計画しよう」⁽⁶¹⁾ とする。更に十字架についても, Jude の生涯はアルパからオメガまで十字架であったといえるぐらいである。彼と Sue の先祖は絞首台に吊りさげられ, その宿命という十字架をかつぎながら, Jude はよろめきつつ死へ向ってゆく。二人が会った場所も, その個所を意識的にはずしはしても, 「殉教遺蹟を示す歩道の十字架」⁽⁶²⁾ のところであったし, 「彼ら二人は同時にその十字架標識に収斂 (converge) していった」⁽⁶³⁾ のである。あるいは, Sue が彼から決定的に別れる決心をするときの頭上のラテン十字架⁽⁶⁴⁾の妖しく美しい描写をみよ。Jude の人生の決定的瞬間にはほとんど常に十字架が関与している。Little Jude の縊死は無論, Christminster の情景に必要以上に出てくる「十字路」など, Jude の生涯の背後には十字架が loom している。しかし, これらの類似点にもかかわらず, いなむしろ彼らの人生が似ているがゆえに, 相違点により大きい irony が生じる。Jude は誘惑に負けるし, 説教らしい説教といえは, 再度 Christminster 入りした日に群衆の前でするだけで, 求めた水も与えられず, まさに当の30才に死んでゆく。がしかし, 二人の根本的な相違は別のところにある。

(60) *Ibid.*, p. 147.

(62) *Ibid.*, p. 116.

(61) *Ibid.*, p. 155.

(63) *Ibid.*, p. 116.

(64) *Ibid.*, p. 422.

(65) 作中, Bunyan に直接に言及したところは, 私の気がついた所では, 3, 4ヶ所しかないが, 「ユード」は「天路歷程」の一変形であると思う。Hardy の母の愛読書の一つは, Bunyan の著作だったし, Hardy 自身も幼少の頃から Bunyan を読んでいた (cf. Evelyn Hardy, *Thomas Hardy*, pp. 9-10, 38) ことや, Hardy の他の作品でも折にふれて出てくることを思えば, 作品全体の構造として, 意識的にしろ無意識的にしろ, 「天路歷程」のそれを用いて, アイロニーを強めることは十分ありえるであろう。

Jude の生涯は、また、Bunyan の *The Pilgrim's Progress* の Christian にも似ている。⁶⁵⁾「光明の市」を望み見て、Jude もエルサレム詣でをする。だが、Christian と Jude という名の違いが示すように、この二人の辿る運命の差とそれより生じるアイロニーは大きい。Christian はあらゆる試煉を経て、天国入りする。彼には、シオンはシオンだったし、そこには神がいたのである。一方の Jude では、エルサレムなる Christminster は「虚栄の市」であり、地獄だった。がこの場合も、二人は別のところで根本的に違うのである。

それは、神の有無である。Jude には、神はない。作中、Immanent Will を思わせるものが幾ヶ所か出てくる。しかし、Immanent Will は神ではない。やがて目覚めて、キリスト教の恩寵の神になってゆくのだ、という考え自体が、キリスト教の神の否定である。いかに、『コリント前書』13章をもってこようとも、そうなのである。体制は、己れに危険なものを察知する能力はきわめてすぐれている。Establishment を否定するからこそ、作品 *Jude* のもつ危険性は、たゞちに、牧師を先頭とする世間からの石つぶてとなって顕われたのである。それは、68年より今にかけて、全国を席卷した大学革命において、ラディカルな問題を提示した者たちが、大学教官を先頭とする世間に、扼殺されていったのを見れば、よくわかることである。Jude の悲劇は、正しき絶対少数者が、いつの時代にもこうむる悲劇である。その意味で、はりつけになったキリストのそれと、本質を一にしている。同じく、世間より追われたフォイエルバッハの『キリスト教の本質』より引用して、この小論のまとめとしたい。

「われわれの時代においては、真理はたゞ不道徳性であるばかりではない、真理はまた非学問性なのである。……学問が真理に到達し真理になるところでは、学問は学問であることをやめ警察の対象になる。すなわち警察が真理と学問との間の境界なのである。真理であるのは人間であって「抽象的な理性」ではない。また真理であるのは生命であって、紙の上に止まっている思想・自分にふさわしい全実存を紙の上にもっている思想ではない。それ故に、直接に筆から血へ移行し理性から人間へ移行する思想はもはやなんら学問的な真理ではない。学問とは本質的に単に怠惰な理性がもっているところの害にはならないがしかしまた役にも立たない遊び道具にすぎない。」⁶⁶⁾

(66) フォイエルバッハ『キリスト教の本質』(岩波文庫、船山信一訳)、上巻、pp. 19-20。引用文は、第二版への序言で、1843年2月14日の日付である。*Jude* 連載より約52年前のことだが、その本の契機は、'The letter killeth'への憤りであ

り、結論も Hardy と似たところがあるのは当然かもしれない。イギリス文学の伝統を George Eliot—Hardy—Lawrence と位置づけるのは、一つの有力な考えである。その George Eliot が、『キリスト教の本質』を1854年に翻訳していることは注目してよい。

上記引用文の「害にはならないがしかしまた役にも立たない」というのは間違っている。Christminster も、フォイエルバッハ自身がその犠牲になった「キリスト教的国法」(同掲書、21頁)も、考えてみれば、戦慄すべき害悪、即ち、ある勢力からみると役立つもの、を持っている。この小論の本文を書いた後、たまたま高尾利数著『イエスは全共闘をどう見るか』を読んだ。'Christminster' は、日本ではむしろ東大や京大を筆頭とする大学とその関係者を表象するけれども、「キリスト教主義大学」に於て同質の問題が一層鮮明に生じていることがわかった。